

音楽学校にオペラのプロンプターになるための学科やセミナーはない。劇場で実際の現場に触れながら経験を積んでいくしかない職業である。必ずしも指揮やピアノの技能を持っている必要はないが、優れた読譜力と共に、かなりの生まれ持った適性が要求される。現在ウィーン国立歌劇場は四人の専属プロンプターによってカバーされている。ザルツブルクの音楽祭にも出張したり、全世界の劇場から後進の育成を依頼されたり、と表に出る事こそ少ないが、大変なエリート職なのである。

棒振りとは苦勞人

数多くの音楽家の職業の中でも「指揮者」というのは大変見映えも良く、音楽にはふだんあまり関わりのない一般の人々にもアピールし、憧れのまとなる。何十人ものメンバーで編成されているオーケストラを前にし、白い指揮棒の先から、時には力強く、時には甘く訴えかけるように、美しい音楽をいともやすやすと織りなしていく姿は、確かにひとつのスター的存在である。そしてウィーンフィルやベルリンフィルのような一流オーケストラの定期演奏会のステージに立つことは、指揮の世界において極められる最高のステータスのひとつだろう。

最近では若い指揮者のための国際コンクールも各地で定期的に催されるようになった。これによって、若く才能ある新鋭達がデビュー一日目からコンダクターとしてステージに立てるチャンスが、比較的得やすくなった。一昔前はよほど恵まれた環境にいる数限られた人材以外にはなかなかそういった機会は与えられず、かなり長い期間の下積み経験を経て、初めて一人前と認められるのが普通であった。

音楽学校で指揮の基礎を勉強したのち一番手近にある職は、田舎の小さな歌劇場のコレベティター（伴奏者）である。歌手のリハーサルのピアノ伴奏を受け持ちながら、アンサンブルのタイミング、各パートの絡まり具合やバランスその他を覚えていく。オーケストラリハーサルの指揮を手伝ったり、座付きの合唱団の訓練を行ないながら、実地での指揮の経験もできるだけ増やしていく。そうこうするうちに公演の指揮を受け持たせてもらえるようになる。この実績をかかげる事によって他の劇場と交渉する道も開け、劇場のランクもだんだん上のものになっていく。こうしてある程度の幸運に助けられながらも次第に人々の注目を集めるようになっていくのである。

今は亡きカール・ベーム、そして「帝王」とまで称されたカラヤンでさえも、程度の差こそあれ、こういった歌劇場での下積み経験を持っている。何も若造のうちから世界のスターではなかったのだ。

「苦節十年」とは言うが、その間に身につけるべき事はたくさんあるだろう。数々の作品に精通していくのも必要不可欠であるが、ひょっとしてそれ以上に大切なのは「オーケストラの団員をなだめすかし、時にはおだてながらも、厳しさをもって自分の支配下におくこつを体得する事」ではないだろうか。指揮の技術そのものに個人差が生じるのは当たり前のこととはいえ、いくら技術だけ持ち合わせていても、団員から総スカンをくらってそっぽを向かれてたのでは元も子もない。事実そういう険悪な事態におちいってしまうことが結構日常茶飯事のように起こっているのである。

オーケストラとは、何十人も異なった性格を持った人間の集団であり、各人それぞれ自己の音楽性と経験にそれなりのプライドを持っている。それと同時に「本来ならばこんな席で他人の言いなりになって弾かなくとも、もっと晴れの舞台、もっとまじなオーケストラにだっていられた筈なのに……」といった鬱積した感情をもあわせ持っている事が少なくない。特に二流以下のオーケストラと仕事をする場合、そのあたりを

うまくとらえ、間違ってもコンプレックスの逆撫でなどしないように気をつけながら誘導していかないと、自分の思うような音楽が作れなくなってしまう。

有名かつ優秀なオーケストラを指揮する事になればなつたで、また別の苦勞がある。団員達はそのオーケストラのメンバーである事に絶大なるプライドを持ちつつ、まだ駆け出しの指揮者に対して「何を偉そうに。我々はつい先週も指揮者の中では五本の指に入る某氏と同じ曲を演奏したばかりだが、あの時にはそんなふうには弾かなかつた」などと腹の中では思っていたりする。要するに、別の面で扱いにくさが出てくるのだ。故意に譜面のない音を出して新米の指揮者を試してみるような、一種の「嫌がらせ」も皆無ではない。

いやはや指揮者とオーケストラとの関係は嫁と姑の関係以上の難しさをはらんでいるようである。若い指揮者がデビュー直後につまづいてしまう原因なども、このあたりに関わりが多い。しかし背景にどのような経緯があつたにせよ、指揮者もプロの音楽家、その演奏のみが評価されるわけで、実際のコンサ－トがピシッとまとまっていなくては何とも仕方がない。

ここで現実にも目を戻して現在活躍中の指揮者達を眺めてみよう。とても全員が揃って温厚な好人物とは認め難い。それぞれころかひとすじ縄ではいかぬ、一癖も二癖もありそんな人間の方が幅をきかせているようである。それでも皆それぞれ見えないうところでは大変な苦勞を重ねながら、現在の地位と実力とを築いてきたのだろう。

職業病

音楽家、演奏家といえども身体を使う商売であり、使い方によっては生命に別状は無いまでも、キャリア